

ひきこもりの若者の葛藤する機会を保障するソーシャルワーク

ーソーシャルワークにおける方法論の確立を目指してー

○ 長崎国際大学 氏名 安藤佳珠子 (会員番号 8139)

キーワード3つ: ひきこもり 若者 葛藤

1. 研究目的

若者のひきこもりに対する支援に注目が集まってから、20年が経とうとしている。おおよそ、若者のひきこもりに対する支援の目的は、ひきこもりの状態を「治す」といったことではなく、若者たちが安心して育つ場が保障され、そのなかで、自己そして他者と向き合い、自立していくことであると考えられている。この過程は、ひきこもりの若者の葛藤する機会の保障とも言い換えることができる。本報告の目的は、当事者の葛藤する機会の保障を、ひきこもりの若者に対するソーシャルワークの方法論として、位置づけるための検討をすることにある。

2. 研究の視点および方法

若者のひきこもりに関する先行研究から、「自立」をめぐる諸課題を整理し、ソーシャルワークにおける方法論を検討している。まず、若者のひきこもりに対する支援の概要を整理し、政策論における若者の自立と参加の重要性を提示する。次に、ソーシャルワークにおけるひきこもりの若者に対する支援の場のあり方を検討する。そのなかで、若者たちは自己との向き合いを通じて、社会に参加する。その過程で、若者たちに、何が生じているのかについて、「葛藤」というキーワードで整理していく。

3. 倫理的配慮

本報告は、人を対象とする研究ではないが、「日本社会福祉学会 研究倫理規程」を遵守し、規定に示す項目に抵触しないことを確認している。

4. 研究結果

山本(2009)は、ひきこもりの若者に対するソーシャルワークにおいて、若者たちが安心できる場と、その場で仲間とかかわり、自らの課題と向き合う実践を展開することが重要であると指摘する。この安心できる場とは、「若者自身がもっている発達課題に丁寧に向き合う場」であり、「社会との関係で自己が果たすべき役割」を明確にしつつ主体的に解放たれる場である。こうした居場所で、若者たちは、他者や社会とのかかわる力を自らのなかに育て、自己との向き合いを通じて、社会に参加する主体として育っていく。

居場所支援から発展して、ひきこもりの若者たちのペースで働ける場ー中間就労ーが展開されている。しかし、居場所に参加する若者の多くは、学校に通うことや、企業で働くことをためらってしまう。一度〈普通〉のルールを脱した自分が、再び〈普通〉の世界に入っていくてもよいのだろうかという思いから、〈普通〉へ戻ることにに対する不安が生じるためである。ここでいう〈普通〉とは、学卒後、すぐに仕事に就き、結婚をし、子どもを産み育てるといった青年期の移行モデル(宮本2004)を指す。佐藤(2005:211)は「居場所

の若者たちが〈普通〉へのこだわりから解放されるためには〈普通の働き方〉への問い直しも必要になってくる」という。

この〈普通〉へのこだわりから解放される過程で、ひきこもりの若者たちは、自己と他者との葛藤を必要とする。それにより、自分らしい働き方や、他者や社会とのかかわり方を獲得していく。吉川（2001）は、「自分らしさ」の形成において、葛藤の経験を重視している。「自分らしさ」の原動力は欲求であり、その欲求が外界にある規範とぶつかり、葛藤を起こすことによって、「自分らしさ」がつくられる。言い換えれば、葛藤の結果、欲求と規範との間に折り合いが付き、「自分らしさ」が生まれる。

また、畠中（2009）も、葛藤体験を重視した上で、「関係性のなかでの自立」が現代の子ども・若者の自立をめぐる諸課題において重要となるとしている。「関係性のなかでの自立」とは、他者との関係性を生き、他者から飲み込まれる関係でも、他者を飲み込む関係でもなく、自分は自分であるというあり方を指す。現代社会は、対人関係、関係性やつながり、そして情緒といったものに負の影響をもたらしており、そうしたものを取り戻す支援が必要である。

5. 考察

若者のひきこもりに対する支援において、当事者や家族（特に親）が、〈普通〉のルールに囚われることがよくある。親は子どもの状態を心配しているのではあるが、同時に、〈普通〉のルールに少しでも早く戻らせなければならないと焦っている。一方、ひきこもりの若者たちも、この〈普通〉のルールに囚われてしまう場合が多い。確かに、〈普通〉のルールから降りた／降りざるを得ないとき、その先の人生が見えなくなることは事実である。しかし、ひきこもりの若者によっては、その状況が10年、20年も続くことは珍しいことではない。若者のひきこもりに対するソーシャルワークは、当事者を〈普通〉のルールに戻すことではなく、当事者が自己と他者と葛藤をしながら、「関係性のなかでの自立」を獲得する過程にある。そのため、ソーシャルワークには、ひきこもりの若者たちが、葛藤する機会を保障することが求められる。

謝辞：本稿は、JSPS 科研費若手研究「ひきこもりの若者を対象としたソーシャルワークにおける仮説モデル構築に関する研究」（研究代表者：安藤佳珠子，研究課題番号 18K12984）の助成を受けて行ったものである。

吉川武彦（2001）『〈引きこもり〉を考える 子育て論の視点から』日本放送出版協会。

佐藤洋作（2005）「〈不安〉を超えて〈働ける自分〉へ ひきこもりの居場所から」佐藤洋作，平塚眞樹編著『未来への学力と日本の教育⑤ニート・フリーターと学力』明石書店，211。

畠中宗一（2009）「関係性なかでの自立—情緒的自立のすすめ」『現代のエスプリ』No508，ぎょうせい，5-26。

宮本みち子（2004）『ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と形の変容』勁草書房。

山本耕平（2009）『ひきこもりつつ育つ』かもがわ出版。